

2010年10月11日

「生と死を考える会」 古谷小枝子さん

<心臓奇形の息子と生きた11年>

わたしの息子は心臓に奇形があり、生まれて十日の命と言われたのですが、十一年間生きました。わたしは息子とともに生きることで、人の生命力を教えてもらいました。

子供が亡くなった時、「よく生きたね」と言ってやりましたが、亡くなった瞬間は涙もこぼしませんでした。みんなが去って、一人になった時に涙がこぼれました。息子が亡くなった後も、夫婦で泣いて苦しみや悲しみを語ることは十年間ありませんでした。

そんなとき、上智大学のアルフォンス・デーケン神父さんとの出会いがありました。デーケンさんは、デス・エデュケーションの専門家ですが、「死と向き合って問いを持って生きなさい」と教えてくださいました。

三十年前は日本人にとっては死はタブーで、死を語ることすら困難な時代でした。デーケン神父さんとお会いしてから二週間後に「息子さんのお話をセミナーで話してほしい」と電話がかかってきました。

息子は北斗七星にちなんで、玄斗と名付けました。乳が吸えないのでスプーンで、小鳥の餌づけのようにして欠陥だらけの赤ちゃんを育ててゆきました。細いながらもなんとか生きて、十日と言われた命が一年生きました。はしかもクリアしました。

そんなからだですから、外に出るのも危ぶまれましたが、「いったい生きるって何だろう。人と一緒に生きてこそ人では」と考えて、一年間幼稚園に行かせました。少し走ると頭が痛くなって倒れてしまう。迎えに行くと先生のところで寝ています。いつも死がぶら下がりながら生きていました。小学校もみんなに助けられながら小四まで通いました。「いじめはこのクラスにはありません」と担任の先生がおっしゃったのを覚えています。

しかし、とうとうトイレで脳血栓になり、半身不随になりました。「君は手術しないと死ぬよ」と主治医の先生が息子に言いました。「先生に言い直してもらおう」と夫は言いましたが、言い直したことが息子にはわかってしまいます。どうしようと悩んでいたその時、後ろから「わたしがいる」と言われたような気がしました。

「死ぬとか生きるとか、誰が決めるの？ 玄斗は誰の子？」と息子に言いました。

「ぼく、神様の子」と玄斗は答え、なんとかしのぐことができました。

「玄斗、マリア様が見えたら一緒に行くのよ」

「解剖させてください」とお医者さまから言われたので、

（今なら痛くはないよね、使ってもらおうね）と玄斗に言い、「家族が悲しまないように解剖後は元のからだに戻してください」と承諾しました。「半年前に手術をしないで良かったです。動脈と静脈が逆になっていて、かろうじて破裂しない状態を保っていたのです」と言われました。

からだに戻ってきてはっとしました。解剖で内臓を抜かれてしまい、まるで藁人形を抱いたような軽さなのです。

デーケン神父さんに頼まれて、この体験を七百人の前で泣きながら話しました。子供の存在は今でも生きています。一切忘れておらず、まるで昨日のようです。

デーケン神父さんに「よく話してくださいました」と言われました。ありのままの死別の体験を聞いていただいて、わたしの中の何かが溶けていくように感じました。

それがきっかけとなって、「生と死を考える会」の世話人になって欲しい、と言われました。牧師さんや住職さんなど、いろんな宗教の宗派の先生からお話を聞きました。

大和の「生と死を考える会」を始めてから十年目になります。デーケン先生はこうやりなさい、とはおっしゃらなかった。定例会が終わった後に、参加した皆さんが自由に胸の内を語り、聞く人みなで分かち合う「分かち合い」という時間を持つようにしています。

どんな人にも物語があります。身近な方と死に別れた体験も、ひとりひとり違います。死についての感じ方もおひとりおひとり違います。心の内を語り、聞くことでその事実を受け入れるとともに心は癒されていき、さまざまな気づきがあります。

人は裁けない、教えられない、比べられない。一人の個の存在の物語があるということを知って、分かち合いをするときの四つの願いを作りました。

「みなさん、自分のことを語りましょう」「人のことをよく聞きましょう」「いいか悪いかではなく、ありのままのその人の話に耳を傾けましょう」「わたしも言いたいことがあれば言っていきましょう」

ある方が言ったひとつのことばで、自分の悩みがふっと弾けるときがある。これが、人間存在のスピリットだなあと感じます。

<ホスピスマインド>

ホスピスの元祖のフランスのオテル・デューでは、中世にペストにかかった庶民をベッドに寝かせて看護したのです。フランス・ボージュ地方のオテル・デューが有名ですが、その前はパリのノートルダム寺院の前にもありました。

19世紀、アイルランド紛争のときに、メアリー・エイケンヘッドというシスターがいました。アイルランドはイギリスにやられっぱなしで、じゃがいもで生き延びた国ですが、彼女はもてなす心で近代ホスピスの始まりといわれるホスピスを作りました。

日本は四国のお遍路さんもホスピスの元祖です。徳島では、お寺からお寺にお遍路さんがまわりますが、巡礼路の両側の家が病気になったお遍路さんを看護します。おせっちやといいますが、これはお接待のことです。わざわざホスピスと言わなくても、日本にも昔からホスピスの心はあったのです。極楽院というのもその名残だと聞いたことがあります。

精神より心の持ち方、生き方としてのホスピスマインドですね。誰が病む人のかたわらにたたずむのかが問われている現代だと思います。

ホスピスマインドというのは、どんなホスピスを作ろうかという形の問題より、そこにかかわる一人ひとりの生きざまや生きる価値観、そういうものが発展してゆく道のりをみんなでおぎないながら、人と共にあることが大切なのではないかな、と思います。

<人を癒すもの>

岡村明彦さんという五十六才で亡くなった写真家がいらっしゃいました。医学書院から『ホスピスへの遠い道』という本を出しています。彼の講義を聞いた看護師さん、ジャーナリスト、演出家が集まってきました。

栗本先生というお父さんの代から精神病院を営んでいる先生が悩んでいました。その岡村さんが、鉄格子を全部はずす演劇を取り込みました。ゴーリキーの『どん底』を職員と重症患者で作ると、自己回復する人が何人も出てきました。演じることに生きる重要性が含まれているということです。宮城大教育学部教授で演出家の竹内敏晴さんとの出会いもありました。高校生まで耳が聞こえなかった方ですが、精神を病んだ人に演劇を演じさせ、歌ったり、演じたりしながら自らの回復力を得ていくメソッドです。

日野原重明先生が、スピリチュアル学会で「人だけが人を癒せるんだ」と言った先生に対して、こうおっしゃいました、

「自然が大きな力を持つことを忘れてはいけない」

自然、雑草、小さな虫、アカマンマ、オオイヌノフグリ、苦しいときにはそんな小さなものをなんといとしく感じられることでしょうか。でも、今はバラがきれいだと感じます。

「お子さんが亡くなったときに、泣かなかったことがトラウマだ」

専門家にそう言われたのが、逆にトラウマになっているケースもあります。洗脳されているんです。

「殺してやりたいわ」などと激しい言葉を口にしながら、その人は変化していきます。言葉は出し殻なんです。「変化は実体である」自らそこに可能性や希望を、気づいていく道のりを歩いています。

<話を聞くということ>

病のため孤独になられている方のそばでお話を聞く傾聴ボランティアというボランティアがあります。

「こんな場合は、こう答えるといいらしいですね」と専門家がいます。しかし、「こういう時にはこう言う、こう答える」と技術を頭に入れすぎてはダメです。聞いたことを反復するというのも、傾聴法ではよく言われますが、「反復っておかしいんです」とボランティアスタッフのみんなが言います。

反復する方法というのは、ピアノのレッスンのドレミファだと思ってください。あとは忘れていいです。あなたが今まで生きてきたあなたのやさしきでそこにとどまってください、そうすればきっとあなたの優しきで相手からことばが引き出されると思うんですけど、とわたしは言いました。

「人の話を聞く、または話させてもらう、ということは人間愛ですね」とあるおばあさんがおっしゃいました。これが本当の原点かなと思います。

自分から自分を開くと、みんなどんどん話し始めます。どんな姿勢でそこに座るか、関わりを持つほうの人生観、死生観、そんなノンバーバルの思いというのは、人に伝わるんだと思うのですね。

専門家かしろうとかではないのです。裁く目をもって、これはいい、悪いと考えながら目の前に座られると一言も話せなくなるのです。人の苦しみなどわかろうはずもない、と河合隼雄さんが言っていますが、わからないのはわからなくてもいいんです。しかし、気づくことがいっぱいあると思うのです。

長く生きようと短くても、今を生きることが大切かな、と思います。明日は生きる。その先は委ねる。どの宗教かは関係なく、人間を越える大いなる存在がいます。人は紡ぎながら今がある。

生きていく今を生きるための生活哲学、それは「これは何だろう」という問いを持つこと、自分の内面と語りあう時間を持つことが大事。その結果、人と関わりあうときにやさしきが伝わっていくような気がします。